空間・社会・地理思想 15 号，77-91 頁，2012 年
Space, Society and Geographical Thought

国民、人種、そして情動
―国民的遺産の場における感覚と情緒―

マイク・クラング、ディヴィア・トーリア＝ケリー *
（森　正人 ** 訳）

Mike Crang, Divya P Tolia-Kelly
Nation, race, and affect: senses and sensibilities at national heritage sites
Environment and Planning A, 2010, volume 42, pages 2315-2331.

© from Pion.

本稿は国民アイデンティティに対する遺産の関係性に注意を払う多数の研究を取り上げ整理する。多くの研究は遺産の制度化をとおして過去が象徴的に構築されることに焦点を当てているが、それにより遺産の場における情動的経験を低く見積もる傾向がある。本稿で私たちは、遺産に対する感じられた経験や情緒の組織化がしばしば重要であり、またこれらが人種化された様相を呈することを議論する。それゆえ、私たちは市民の包摂を助長する企てに注目し、それらが市民の開放性だけでなく、感じられた排除や恐怖を克服する必要があることを議論したい。私たちはこれらの問題を例証するために 2 つの規範的な遺産を取り上げる。第一に都市の国家的施設として取り上げられるのは、非感情的で教育的な装置において語りかけていると因習的に考えられている大英博物館である。オセアニアのギャラリーに注目すれば、世界中から器物を蒐集しロンドンに持ち帰ったというこの博物館の歴史は、蒐集品に関するディアスポラ的な共同体の理性的感情と結びつけられる。第二の例はイギリスの湖水地方である。ここは直感的な情動的反応を動員する田舎の国立公園として選ばれ、それは国民的情緒と深く結びついている。しかし、人種的排他性に対する配慮も惹きつけている。

私は他の人たちが言おうとしないことを話したいと思います。多くの博物館は征服の苦痛から産声を上げました。私は博物館のコミュニティがこの痛みを認識する必要があると感じています。世界の文化を提示する博物館は、その蒐集品が獲得されるに至った物語を認識すべきです。そしてこの苦痛に対して謝罪する必要があります。

Professor Jack Lohman, Director
Museum of London Group, in GLA（2005, p.23）

博物館の蒐集品は多様な出所から集められてきたもので、ローカルな関心とグローバルな関心を結びつけるための多様な方法を人びとに提示しています。これらは幅広い感情を結集し、また異なる問題に取り組むべき寛容な空間を提供する潜在性を持ちます。

Department for Culture, Media and Sport（2005, p.14）

はじめに

本稿はイギリスにおける市民包摂のプロセスによって新たに形づくられた「あらゆる人のための遺産」という正説の限界を検討する（Moscati, 2007）。国民的遺産に関する一連の重要で効果的で先進的な報告書は「寛容な空間」を創造するように訴えかける。これらは遺産の場における市民の統治性が持つプロセスの批評に応答するものだが、包摂を助長するという重要な側面を見落としている。つまり、ロンドンの博物館や美術館における「社会の主流になりつつある人種」に関する説得力を持った議論が展開される120頁のうち、たった3つの側面だけが展示の感情的応答性や情動を接線的に呼びかけている。上のローマンの引用はまったく真実である。ほかの執筆者は展示に関する感情的応答の問題を提起していない。この誤りを正すために、本稿では2つの変化を作ろうと思う。第一に、私たちは国家的な遺産の場におけるオーディエンスと学芸員の展示との間の情動的、感情的、そして身体的諸関係を考える必要があることを強調する。私たちは市民の知識よりも理性的な感情feelingや感覚の生産や循環の方が異なる人びとの排除と包摂において決定的だと議論したい。国民的記憶と国家的遺産は、スリフト（Thrift, 2004）が論じる序動的枠組みの中に埋め込まれており、国民的感情と身体の政治学を促進し、形づくり、動員し、動機づける。第二に、私たちは国民と景観あるいは遺産の空間の間での遭遇において表出する、ある内部者あるいは外部者として経験される国民の情動的配分affective economies

*　両名ともダラム大学
**　三重大学

（Ahmed, 2000）に目を向ける。市民性遺産の場は次のような空間として審問されている。すなわち、国民の情緒にとって貴重で、歴史的で、そして非常に典型的なものであり、またそれゆえ市民性の美徳でもって適切にそれを楽しむことができるのだと鼓吹する場所であることを市民性の情動的配分が請け合っていることが問題となるのである。

遺産の情動的エネルギーと感情的力に焦点を当てることは、表象と理性的感情の問題をめぐる分析的アプローチの変化をともなう。遺産研究はその場所をめぐる、そしてそこに埋め込まれている言説に多大な関心を払ってきた。それらは博物館を「読む」ための多様な記号論的かつテクスト論的戦略を展開し、比喩的なテクストとして、そしてそのテクストの配置をとおして遺産の場を解きほぐしてきた（Crang, 2003）。感じられた遺産に目をやることで、私たちは「言説的に埋め込まれた諸表象の物質化する力からだけでなく、直感的で情動的で、そして前言説的なプロセスから」現れるものとして帰属を理解し、またそれゆえに「表象的な意味を抜き出す一連の場所としてではなく、それをとおして思考の倫理的な情緒が現れうるようなプロセスと実践の領野として世界を理解するエートス」（McCormack, 2003, p.489）が要求される。それは、堆積したあるいは自然化された一式のカテゴリーとしてではなく、むしろ、動いているものとして社会を検討することになる。私たちはすることと感じることに対する原因として、そして相異なる気持ちと表象と思想を結びつけるものとして遺産の場に関心を寄せている。私たちは、それらを動いている感情として捉えようとする、近年蓄積されつつある情動の地理に関する研究に従っている。私たちは遺跡の場を場所、事物、アイデンティティ、そして帰属の間の交流を可能にする重要な役割を担うものと考える。情動は個人的な次元をこえて作用し、別の個体を横断するのである。

しかし、遺産の場は客体、人間、感情、理念の循環を別様に可能にしたり阻んだりする。少なくともかなりの部分で、それらはまた多かれ少なかれ首尾よく事物とカテゴリーの両方を固定し安定化させそして貯蔵するようにも意図されている。博物館は、事物の上に堆積したカテゴリーに対して作用する。そして風景はしばしば社会的価値を自然化する。地理学における情動の研究は、不変性や非妥協性よりもむしろ、フェティッシュ化され物象化された諸関係、反復としてのパフォーマンスに関心を向ける（Pile, 2010, page 10）。サルダーニャ（Saldanha, 2006）は、人種の分類が次第に「粘着的」になり、ローカル化した「肥大」が不安定さから出現するような人種化された集合体へと集結する様子を捉えるために、粘着性のメタファーを用いて、このいくつかを押し開いている。遺産の場によって私たちはそうした契機を捉えられる。それぞれ異なる循環と肥大に取り組むことで、あらゆるものを同じ個体として捉え、また情動の暗黙の普遍性でもって、存在論的な一元論の部分的削除を抑制することができる。それは理性的な感情がジェンダー化され、人種化され、階級化された場所の経験を形づくることを強調する（Pile, 2010, page7）。それゆえそれは超人間主義を支持することで個人的な人間の感情を脱中心化し、集合的な情動が不可避的に人間のどの理性的感情放棄されるべきかという問題へと向かっていく（Tien, 2005）。普遍的なものとしてある情動的反応の形態をそれとなく優先づけることが排他的な遺跡の特質になっている事態は危険である。そうではなく私たちは地理（場、状況、空間）、場所（それらが出会い、経験され、感じられる）、身体（人種、市民性、位置決め）、そして「遺跡」の装置（展示物、分類法、保存法）の間の諸関係によって作り出された差異化された情動的エネルギーを強調する。

私たちは、市民性の儀礼を推進する、2つの対照をなす偶像視された国民的遺産の空間をとおして、これらの差異化された諸関係を検討する。ここで市民の実践が「ネイティヴ」「自然」「文化」の編成的なカテゴリーによって、帰属を展示し植え付ける（Hall, 1997; Young, 2008）。〔大英〕博物館は文化的分類法における知識の循環と固定を通して、「ネイティヴ」が他者として作られ、展示される場の例である。他方、〔湖水地方〕国立公園は、ある審美的分類法をとおして形取られた特定の事物と生物相の管理と包摂をとおして、「ネイティヴ」が自己として作り出される景観を提供する。都市と田舎、両方の例を選んだのは、それぞれの所在地が、人種的な情動を変造することもあればしないこともあること、そして、白人の田舎性とスモポリタニズム的な都市性にこれらの情動を安易に位置づけることに抵抗することを強調するためである。それぞれにおいて、情動的な様式と関与が真に排他的な国民的遺産のプラクシスの可能性を提供しうることをこれから見ていこう。

本稿は大英博物館の例から始まる。そこで古い分類法が新しい市民的包摂性に取って代わられつつあることを考えたい。新しい多文化主義的な正当性を掲げる「新しい」博物館学からの強力な批判を導入する以前に、精神を鼓舞し、教導し、改変する空間として（Nielsen, 2008）、大英博物館に権威を与える

植民地的、国民的分類法をまずは吟味したい。私たちが提示するように、この正統性は身体と客体を組織化する排他的な情動の配置を依然として保持してはいる。本稿はそこから、非民族中心主義的なものへと向かい、再現前されるコミュニティとの協同作業をとおして歴世の集合的な肥厚を創造する方法を提起する近年の展示を検討する。第二の例は経験と情緒の異なる様式を刺激する湖水地方国立公園である。私たちがこの湖水地方を選んだのは、「イングランドらしさの典型的な見解が構築されてきた田園趣味をとおして、田舎、国民、人種化の結びつきが長続きしている」(Neal, 2002, page 444)からである。「知覚すべき目と楽しむべき心を持つあらゆる男性(ママ)が権利と影響力を有する」有名な「ある種の国民的財産」(Matless, 1998, page 251より引用)としてワーズワースがこの風景を特徴付けたように、ロマン主義的な伝統の情動的な配分はこの国立公園のれっきとした土台となっている。しかしこの風景に対する情動的な反応は、よく引用されるイングリッド・ポラードの1984年の『牧歌的な間奏』に描かれているように人種的にコード化されていると議論されてきた。「それは、まるで黒人の経験が都市環境においてのみ生きられるものであるようなものだ。私は湖水地方が好きだ。そこで私は白人の海の中にある1つの黒人の顔のように淋しく歩き回った。田舎へ行くことといつも落ち着かず、不安な感情にさいなまれる」(傍点は原文。Kinsman, 1995, page301より引用)。これらの領域の、しかも人口構成をベースにした遺跡保護は可視的なマイノリティに対して排他性を感じさせてきた(Askins, 2006)。こうした問題は人種的に内包的であろうとする入念な企てへと向かってきた。国立公園の委員会は「非常に白人と中産階級的」(Tolia-Kelly, 2007a, page335)であるために、さまざまなガイドトレックを停止したことに対して、政治的な議論が惹起された。

大英博物館は、推定上はアイデンティティの脱民族主義的な、そしてそれゆえ市民的ナショナリズムの感覚に訴えかけている。そのようなエートスが、場所や土壌との自己同一化を推進するロマン主義的な民族ナショナリズム的情緒が持つ情動的な表出とはまったく対照をなすこの種の制度を整える。情動的、排他的な市民や民主主義や合理主義的制度への帰属感覚を、批判的説明はしばしば妨害する。ロマン主義的民族ナショナリズムがかなり問題的に血と土壌について語りかけるのに対し、批判的説明は奇妙なことに血が出てこない。それぞれ異なる、それでいて一貫性のある方法で、ネイティヴと非ネイティヴの想念をとおして、身体、事物、そして訪問実践を組織立てる植民地主義的分類法に、それら2つが依然として恩恵を受けていることを本稿は示す。文化財に関する議論において見られるような昨今の制度を包括的にしようという企ては、推定上は普遍主義的な枠組みの中でなおも作用している。そこで想定される普遍的な価値は、ある西洋的な前提を背負い込んでいる(O'Neill, 2004)。そしてその場所は、差異が消し去られる1つの普遍的な情動的な反応を求める。「人間/男」の分類法を固定化する、19世紀の「人種」の解釈は、国家的な博物館や国立公園の市民的空間に染みこみ、想定されたオーディエンスの情緒の範囲を定める。本稿で私たちは、遺産の人種化を理解することはその情動的表出の理解を必要とし、それゆえ情動の理解はその人種化された生産の理解を必要とするのだと議論したい。

感情と情動は市民性の基盤をなす恐れ、帰属、恐怖、そしてモラルの地理をつねに基礎づけている。情動は国民の諸地理の間の遭遇を後押しする(Ahmed, 2004; Thrift, 2004)。アフメッド(2004)が示すように、国民的アイデンティティはある人びとに参政権を与える情緒性をめぐるものだが、人種化された分断線を引くこともある。しかし、この情動のアイデンティティ化に関する研究(Davidson et al, 2005; Thien, 2004; Thrift, 2004)では、国民的遺産産業が国際的諸関係、市民アイデンティティ、国民的誇りを形づくる愛と嫌悪の情動的配分に巻き込まれていることについて多くを語っていない(Sylvester, 2009)。私たちは文化的結束、国民文化、そして国民的歴史が大英博物館と湖水地方国立公園の空間の中でもつれ合っていることを検討する。この介入は、内包的な市民の管理と博物学的プラクシスの要求(Bennett, 2004)と、人種と遺跡に関する引き続きの議論(Hall, 1997; 2000; Littler and Naidoo, 20005)、そして政治的衝突(Karp et al, 2006; Voogt, 2008)の要求を論評する。

遺跡を位置づける―ブリティッシュネス、イングリッシュネス、都市性、そして田舎性―

イギリスにおける遺産と国民アイデンティティに関するあらゆる説明はある問題に直面する。というのも、「イングリッシュネス」と「ブリティッシュネス」といった国民のカテゴリーは打ち延ばして使用することが可能だからだ。イングランド、スコットランドそしてウェールズの歴史的合同は、南部を中

心とした国民的想像によってつねに屈曲されてきた（Daniels, 1993）。スコティッシュネスに対するブリティッシュネス、脱植民地化、内政権付与、そして新しい国際化された国民のイメージの関係は、本稿の射程を超えた別の議論となる（McCrone et al, 1995）。ホーガン（Hogan, 2009）の研究は、イギリスにおける国民アイデンティティの一般的言説を検討し、大英帝国とイングランドの組み合わせの変化を記す。彼女は、1997年の内政権付与以後、イングランドにおけるイングリッシュネスに対する心情が若干増加がしてはいるものの、ブリティッシュネスとイングリッシュネスの間は一般大衆によってしばしば混淆していることを見出している。イングリッシュとブリティッシュの混淆は私たちの文化的領域をとおして維持されており、それについては多くの人たちによって記されていると同時に批判されているので、ここでふたたび理論化する必要はないだろう（Colley, 1992; Gilroym 1993; Hall, 1990）。ブリティッシュネスの生産とイングランドの先細りは大英帝国拡大のプロセスをとおして起こると論じられてきた（Schwartz, 1996）。帝国の縮小はその逆になると考えられるかも知れない。たとえば、ナショナルトラストの創設者たちは、イングランド産の美の保護に対する関心に逃げ込みながら、イングランドの過去を保存する能力の中にイングランドの未来を位置づけ、「そうすることで、ナショナルトラストは、国民的な地理的想像力の中で理想化された農村のイギリスらしさというイメージを救済しながら、大英帝国の帝国的プロジェクトからイングランドを取り出したのである」（King 2007; page 187）。大英博物館ではブリティッシュネスは文明化への前進が、現代の国民の中に再現されている絶頂期へと不可避的に向かっていく存在の大いなる連鎖へと消化されている（Mack, 2003, page 17）。それは、客体、発展段階、そして人間を一緒くたに結びつける分類法の発展によるある「アングロサクソン」人種の生産をとおして実現したものでもある。こうして、人間の民族史的測定と目的論的な人種の説明が、博物館展示において、そして農村民俗の民俗学的地図を介して分節化されながら、「イギリス人種British race」の物語は生産されえた（Young, 2008）。国家遺産の場はそれ自体が、つねに進化しながら、国民の説明とその定義の間の齟齬をたえず省略する役割を積極的に担っている。まさに、遺産の場が置かれている想像的空間の弾性がこれに貢献している。

大英博物館とイギリスの湖水地方は、「国民」と「市民性」のある理解を照合する諸実践を行なう、国家的な制度のなかで作用する。すなわち、その作用を正統化し維持するある専門的な領域の中で形取られた、ある国民的な蒐集展示の声をそれらは持つのである。それらはまた、国民という組織体との関係において、地理的に位置づけられている。大英博物館は、いくつかの大陸にまたがる大英帝国の領土に状況づけられた。その領土は、ホワイトホール、ケンジントン、トラファルガー広場を頂点として意図的に作られた帝国的展示の三角形の中で接合されている。それは帝国の都市の中心だった。そこでは20世紀初頭に、地下鉄に乗れば帝国のすべて―キューガーデンの植物園、ストランドの植民地の大使館から、サウスケンジントンにある、東洋展示の入口を枠づけるインドからやってきたグワリアー門と、「一つ屋根の下の帝国すべて」を提示するインペリアル・インスティテュートを従えるヴィクトリア・アンド・アルバート博物館へと至る―を見ることができるというキャンペーンが張られていた（Driver and Gilbert, 1998; Gilbert and Driver, 2000; Swallow, 1998）。それと対照的に、湖水地方のようなイングランドの国立公園は、「『本物の』イングランドとしての農村的なものと〔本質的には〕他文化的ではないもの」との結びつきが「田舎へのアクセスから物理的にも感情的にもエスニックマイノリティーを排除するために」（Askins, 2009, page 365）現れうるのである。ニールとアジマン（Neal and Agyeman, 2006, page 9）は白人らしさと国民の感覚が、「マジョリティ化した民族的構成、とりわけイングリッシュネスに対するまなざしをエスニシティが開く」ようなこの田舎における理性的感情の感覚をとおして融合されると論じる。二つの例は、ある内部化されたイングリッシュネスと、あるブリティッシュネスの違いを際立たせる。

シルベスター（2009）は、大英博物館のこの地理的要求の帝国的根拠が今日まで生き残っているが、それが別の残響を持っていると記している。

> 大英博物館はいつも狡猾に別のどこかでもある……。それはナショナルでもありインターナショナルでもある……大英博物館は来場者に語りかける。すなわち、大英帝国は、過去の帝国的搾取に対する辛辣な論争や現在の権力の衰退にもかかわらず、依然として偉大であるのだと。大英博物館はまた国際関係の何かについても語りかける。すなわち、文明の衝突などない、私たちがもっとも配慮することのできる国際文化だけがあるのだと（page 53）。

私たちに「自由な国家は民族個別主義的な表皮を捨て去り、文化的に浄化された普遍的で市民的な形態を出現させてきた」(Hall, 2000, page228) と納得させようとする遺産の領域において、「人種」は肉体を持たない自由なイデオロギーの中で不可欠な要素である。このイデオロギーにおいて「人種」は、仮に言及されたとしても、ある直線状の地図が「過去における」(Naidoo, 2005, page 39) ものとして人種主義を描写する知識の適時性へと、溶け込んでいく。大英博物館所長は博物館を、来訪者に「一つのものとしての世界を見る」ことを可能にし、それゆえにより寛容な社会を推進する展示を持つ「普遍的な施設」と表現する (O'Neill, 2004, page 190)。この新しい正説は世界の想定された市民にとってのあるコスモポリタニズムを提供し、とりわけロンドンとのような都市を、ぱっと見たところでは田舎にはないような多文化的に開放されている場として近年、書き直すことに満足している。本稿はそれに対して、市民性のパフォーマンスを活気づける微分的な身体的情動をとおして、人種は国民と国家遺産のモラルの地理にとって依然として重要だと議論する。

情動を市民化する (パート 1) ―ネイティヴの他者を生産し、主体を知る

情動と空間の第一の立体配置としてまず大英博物館を取り上げよう。それは感情を抜きにして、その代わりに教育的研究の冷静な声をとおして話すことを要求する施設である。それは、ある種別的な認識的情緒を用いたテクノロジーをとおしてなされる。博物館は「認識論的であると同時に市民的でもある登記を行ないながら、社会管理のプログラムに対する専門知識の特殊な形態を結びつける」(Bennett, 2005, page522) 統治の道具として作動する。

市民的博物館は、「客体を配置することによってモダニティの断片化し挑発的な状況に対する、ある一貫した文化的応答」(Hetherington, 2006, page602) を分節しながら、世界をカテゴリー化し秩序づけた。この博物館は視覚的知識の身体から切り離され、物理的な形態に変形したまなざしを具える。物理的な形態に変形した。そこでは展示室や建物がカテゴリーを空間化し、博物館の裏側にある論理の視覚的吟味として物理的客体が配置される (Hooper-Greenhill, 1992)。博物館はそのなかで、持ち帰られた器物と国内の器物を固定することで、世界と私たちの場所を描き出した。すなわち他者の特性、文化、そして器物を国民化したのである。それは、分類化とカテゴリー化のシステムをとおして器物の組織と歴史の審美性、文法、そして意味を再加工する、真実の体制を介して、純粋化された家屋domusと異質性を生産した。それは次のような人間と文化のグローバルな動きを制圧し秩序づけることで、

> 客体、アイデンティティ、理念を流れに投げ込む。〔人間の移動〕はモダニティの決定的な要因だが、にもかかわらず20世紀の巧みな編制においてある重要な要因としてぼんやりと理解されたままである。・・・・・・〔そこでは〕しばしば主として脱歴史化された外貌が現れる (Mercer, 2008, page7)。

それゆえ博物館は、諸文化を表象するために世界中から事物を持ち寄り、ラトゥール的な意味で委任のプロセスを用いたのであり (Bennett, 2002, page 31)、それによってこれら表象の新しい中心は、空間的にも時間的にも隔たったものに「他者」の固有性を市民的大衆に対して、空間的にも語らせた。

博物館はそこで知識のカテゴリーに入れ込まれた客体の「民主的」使用が、階級を基盤とした前提条件を付帯しつつも、市民的儀礼を介した市民的美徳を繰り返し教え込むよう企図された一つのテクノロジーである (Hill, 2005)。ギャラリーや博物館を訪れることは、市民的帰属の発現であると同時にそれを繰り返し教え込む手段となった。博物館の装飾的な外装は、国民的美徳の学習と称揚に対する世俗的な社殿という使命を主張している。19世紀の間、新古典主義様式のヘゲモニーは国家と国民の世俗的な価値に対する神殿へと博物館を押し上げた。博物館が単に神殿と似ているというだけではない。それは市民性の世俗的な儀礼が上演されるという点で神殿のように作用するのである。大英博物館の南側にあるメインゲートは、その切妻風ペディメントが「〔普遍的な〕文明化の進歩」と解釈される新古典主義の間口を持っており、二つの世界大戦に自らの命を捧げたスタッフに対する記念碑を従えている (Mack, 2003, page 14)。

推定上はそれほど差異を持たない来訪者に対する大英博物館の普遍的な声は今やより問題含みである。

> もちろん、帝国のエンブレムは遺産の中に気ま

ぐれに現れる。しかし、一般的には、「帝国」は広範囲におよぶ選択的記憶喪失と否認の傾向にある。そしてそれが現れるきには、植民者の視点から語られることが多い。そこで主要な物語は、イギリスがその意思、文化、制度の強要にと、そして世界中でその文明化の使命の書き込みに成功していることを立証する出来事、イメージ、器物の中で持続している(Hall, 1999, page7)。

ポストコロニアルの文脈では、クリフォード(Clifford, 1997, page 212〔邦訳243頁〕)は博物館が、普遍化された意味と来訪者を持つ権威付けされた展示管理の場よりも、もっと「さまざまな世界やそれぞれに異なる歴史、そしてあらゆるコスモロジーをつなぐさまざまな境界域」となるよう求めてきた。ベネットはこのことが「博物館を作り直す」ために発達する新しい「文化的目的性の形」を必要とし、それにより「博物館が文化的多様性の促進のための道具として機能するかもしれない」(2005, page521)と記す。

しかし、帝国的に定義される文化のカテゴリー化についてのナレーションに対するある批判的再検討にもかかわらず、大英博物館が調査、解釈、保存の条件を定義する、一つの公式の普遍性の中に、文化的道具性が埋め込まれたままである。それゆえ、結局のところ、人種主義をぬぐい去った消費的コスモポリタニズムにおいて現れる「他者」の歴史に変化が生じ始める。このように近年の大英博物館は「シャーアッバス―イランの創造」(2009)、「ハドリアヌス―人生、愛、遺産」(2008)、「初代皇帝―中国の兵馬俑」(2007)、「大英博物館の中のアフリカ」(2005)、「アフリカからの視線」(2005-06)、「アフリカの今」(2006)といった「大ヒット」の展示をとおして海外の遺産に関与する傾向にある。

これらの 展示をこえて、ミレニアム以降、博物館の「声」において一つの変化が生じている。ほかのギャラリー、そして新たなメディアとの交流が増大しており、それが制度的な枠組みに孔をうがっている。その博物館の実践はより動的になり、それゆえその知識生産の地理が拡大している[1]。もし西洋の声の中心性が取り除かれたなら、意味と自己同一性の新しい登記が割り当てられるきっかけが生じるだろう――たとえば、近年のアフリカ展示の第二部は「アフリカからの視線」と題され、アフリカの諸国民と先祖のつながりを持つ黒人イギリス人からの視線を含むものだった。スチュアート・ホールや、アフリカ南部や西部のアフリカ人キュレーターを含む、専門家の声も存在する。知的な声におけるこの変化は新しい博物館実践の文化地理だけでなく、来訪者、学術専門家、人類学者との協同作業をとおして鋳造されるアフリカとイギリスの新しい地理も成立させることになる。

そうした変化はその文化的文脈よりもむしろエキゾチックなものの視覚的インパクトに照準することで、他者の文化から持ち帰られた器物の展示が持つ歴史に取り組む。これらの展示の成功は「スペクタクルと娯楽の御用商人に左右される、視覚的商品化」(Bohrer, 1994, page212)の博物館的実践に依っている。おそらく間違いなく、大ヒット展示はこの伝統に挑戦することなく、むしろそれを永続化している。この審美化は、その文化がスペクタクル化されるという、来訪者の自己疎外のリスクをもたらす。その展示は「私たち」によって注意をむけられ「あそこ」の「彼ら」を「ここに連れ戻す」ことを意図する――「彼ら」は今や「ここ」にいる(Lionnet, 2004)。これら遠く離れた植民地的視覚の永続化、そして対話空間を開くことに失敗すれば、怒った大衆によって包囲された王立オンタリオ博物館における「アフリカの中心へ」のような展示へと向かうことになる(Schildkrout, 2004)。ニュージーランドでは遺産産業におけるこの国民人種の感覚は、二文化の遺産、あるいは少なくとも「伝統的に博物館蒐集品を体系付けてきたヒエラルヒー的な領域を崩壊させ・・・・・・ある異所形成」をしようとする、ウェリントンのテ・パパ・トンガレワ博物館のような場における「戦略的二文化主義」(Dyson, 2005, page 129)の展開をとおして扱われてきた。しかしその結果、「白人らしさ」を土着化し「マオリ」を新未開人として均質化することになった。そこでは被抑圧階級は声を奪われ、そして心地よいものに減じられ、永遠の現実から遊離した奇妙なものへと還元されてしまった。大英博物館にとって本当に協同構成的な物質的歴史のためには、どこか別の場所からヨーロッパに持ち込まれた文化的資産や知識の共有があることを認識する必要がある。さもなければ、これらの国際的な器物が集められたもとの場所に対する情緒は失われる。器物は将来性を失い、畏怖と驚嘆に対するその刺激的な力(そして彼ら自身の生物学的生活)は、展示の複雑さとある帝国主義の文化的レンズのしがらみが持つ文法によって限界に行き着く。オセアニアの遺産に対する近年の展示は、協同構成的な歴史とはどのようなものとなりうるのかという例を提示している。

大英博物館における身体／身体は博物館である

大英博物館が持つ、乾いた、教育的な一覧表は人種と文化の植民地主義的な分類法の暴力を正しく伝えない（Anderson, 2007; Bhattacharyya, 1998; Young, 2008）。文化的器物に対する博物館的処置は「他の」文化がヨーロッパとは異なる、思想的かつ感情的感覚を持つために、境界を持つというある理解によって圧倒的に後押しされている。要するに、人種化された国民からの芸術と文化は、未開で、理性的感情に基づき知的でないもの、文明化されていない野蛮人、そして近代性それ自体に位置づけられていない者とされるのである（Cubitt et al, 2002; Gilroy, 1993; Mercer, 2008）。1953年、大英博物館の民族学部門における器物管理者のファッグは次のように記している。

> 芸術家は彼のファンたちと共有する一つの哲学を表現するために、その創造的才能を用いるだろう。彼は遠慮なく、そしておそらく無意識的にそれを受け取っている……が、私たちは異国の人びとの芸術に際会するとき、精神が十分に包容力ある形であるなら、私たちは思想の異質な習慣を認識し損なうことがほとんどない（pages 7-8）。

多くの土着の芸術家にとって、オセアニア文化の表象は誤った解釈と真実の暴力であり、しかもそれは世界中の博物館における芸術と文化の文法と博物館的処置によって永続させられてきたものである。現代のマオリ族の芸術家にとって、古典的な展示は外的でトラウマ的であり、事実ではないし無表情なものである。それは「オセアニア」における植民地主義的な介入の暴力を思い出させる情動的な反応を刺激する。博物館は混乱した場所になっている。これらは遺産の場の情動的配分である。すなわち、集合的に経験された感情的応答を刺激し、それゆえ政治的な力となる。

あらゆる人に該当する博物館空間における物語の構造と内容、そして展示を作ろうとする動き（Alizar,2009）は、参与者として共同体をつなぎ合わせようという新しい動きを生じさせてきた。そのなかで、2009年は大英博物館の一階にあるオセアニアとポリネシア展示室が再開されたという意味で重要な年である。そこでは、マオリ族の彫刻家ジョージ・ヌークが在宅のままポリネシアのアーティストになっている。この展示室の再開は、現代の遺産表象の様式を盛り込み、この教育的な帝国主義的空間を作り開けようという大英博物館のプロジェクトの一環である。ヌークはその蒐集品を現代化し、活性化し、そしてオセアニア芸術の蒐集に未来的な視点を持ち込むために選ばれた。彼は、その伝統的な形態を風防ガラスやポリスチレンなどの新しい素材を用いて加工することで、革新と越境文化の流れがこれまでもそうであったようにポリネシアの伝統の一部なのだということを強調している。展示室はマオリの遺産に対する感覚と情緒を彼らの言葉で再考しようとする「感情の構造」を具体化する21世紀のナレーションによって再配置された。再開のセレモニーは、その展示室の空間がマオリになった――展示品と人びとの両方にとっての正統な帰属の場になった――という意味で重要だった。参加者すべてに市民権の状況を提示したのである。それは博物館と共同体にとって真の意味での市民的な状況だった。帝国的文書と被植民者との間の権力の力学もまた変化した。ロザンナ・レイモンドなどの芸術家によって再現前されたマオリ共同体は、新しく整理された展示棚に大英博物館館長を招き入れた。そこは、マオリとして〔真正な場である〕マラエにやってきたかのように歓迎される場所である。重要な儀礼、歌、かけ声、衣装は、クックによる1768年から80年にかけての航海以降、博物館に集められた〔マオリ語でニュージーランドを表す〕アオテアロアンやポリネシア由来の器物のイギリスの「国民的」コレクションにとって再び埋め込まれた「家（ホーム）」を作るために再生産された（Starzecka, 1996）。これらの器物は、クック船長との交易と親善の目的で与えられた神聖な事物や芸術もあった。しかしインタビュー時、レイモンドはそのとき何も報酬はなかったと感じたと明快に答えた。彼女は少なくとも敬意と好意の交換の展望を回復する一つの契機としてこの再開を捉えた。「マラエの声」を取り込むことで、大英博物館は最終的にそれぞれの家庭から引き裂かれた器物の「家（ホーム）」とされたのだった。この再開により、物理的に身体化された行為遂行的なセレモニーを組み込む博物館の空間へとシフトした。それによってその空間は市民的家庭として、「ロンドンに住むマオリ族、ポリネシア人、オセアニアの共同体によって導かれたホームとしての国家」として提供される。「大英博物館の目的は以前の物語の神話と暴行に対抗することであり、またマオリ族の来訪者に参政権を与えることであった。そして未開な人種のではなく、一つの共同体のために展示棚のなかの展示品や文書を再配置することであった。それらは『ヨーロッパ的な思考に

深く定着したある前提条件の固定概念』に基づき、太平洋の文化的起源の解釈の歴史を下敷きにしたうさんくさい知的進展」に立ち向かう。その概念では、「洗練された手工業技術が、他の文脈では自然に近い人、あるいは19世紀後半には社会的進化の低い人へと帰せられる」(Durrans, 1979, page153)。こうした固定と距離化は協同的な制作のための共感と可能性の新しい様式をとおして最終的に認識され、また書き直された。

この新しい参政権付与の契機の一部は、手工芸品と器物の枠付けを変化させることだった。すなわち、レイモンドとヌークによって新しく依頼された手工芸品はプラスティックというような新旧両方の素材を利用している。新しい素材を利用することは、新しい世代に対して語りかける現代的な文法や審美性でもって展示棚を充実させようとしており、それは物質的にも情動的にも、マオリを未開とする、そして展示品をもう一つの芸術史としてではなく民族誌的なものとする古い博物館的な解釈を妨げる。レイモンドは、オクトーバー・ギャラリーで2009年に企画した展覧会「エスノセントリックスethknow-centrix」で、身体を体系付ける博物館の古典的な意味を温存しながら「博物館は身体の中にある」ということを提示した。関わった芸術家たちにとって、この展示会は、「別の世界、人、場所」について知ることのできる多数の受動的なテクストや器物を展示するのが博物館であるという桑園が刺激されている。そうではなく知性とは、オブジェやテクストを判読可能なものとするよりも、経験へと向かうある感情や身体化された出会いに対して、来訪者を開放することに依存するものとされている。通常の遺跡の出会いは、このイベントにおいて無効となっている。それは大英博物館が持つ「聖なるオブジェが持つ活発な宗教的意味をめぐる普遍的な文化的価値の優位性」(O'Neill, 2004, page 194)という問題含みの表明を暴き出す。ここでの制作権は「他者」によって保持され、来訪者は舞踊、芸術、声といった土着のメディアをとおして彼らと結びつく。それは親族関係の力、地球上の遺産を生きたりそれを残したりするエコロジーのポストコロニアルな再構築によって、神話学のオリエンタリスト的解釈に挑む、現代の精神的な話を成立させる。

展示品はその生きる意味あるいは**ヴァ**(2009年12月3日、レイモンドへのインタビュー)を獲得する。それらは死んだ状態から起き上がり、ある国民的な情緒と呼び起こされたディアスポラ的なアイデンティフィケーションをとおして再活性化する。レイモンドは、ディアスポラ的な身体が博物館空間それ自体であるために、身体を用いることは新しい包括的な博物館法において不可欠であると説明する。それをとおして「世界がその過去を理解し、未来を形づくる野に必要な新しい歴史を書き記すことのできる」(http://www.thebritishmuseum.org/the_museum.aspx)文書と器物に生命を与えることで、身体知は新しく翻訳可能な記録をかくまうのである。

博物館と来訪者、個人と展示会の論理の関係を促進するものとして必要なのは、それらの間の共感である。共感の情動的活力は、普遍的な応答を前提する傾向に対抗するために、個人的かつ集合的な身体の情動的な収容量を用いる一つの契機を、知的にも精神的にも結びつけまた提示する(Tolia-Kelly, 2006)。同じような変化は、キャンベラにあるオーストラリア国立博物館のシニア・キュレーターをつとめるジェンセンの議論にも見られる。彼女は来館者の身体とスケジュールを状況づけることが、以前の博物館的実践において予想されていた不整合の打開に役立つことを論じる。彼女の展示「永遠―オーストラリアの感情の中心からの物語」は2001年3月の博物館オープン時に立ち上げられた5つの常設展示の一つである。この展示会のテーマは、神秘、孤独、情熱、恐れ、分断、献身、好機、スリル、希望、そして喜びである。これらのテーマは偶像やオブジェへのアクセスをとおして照射され、そしてオーストラリアの歴史と直接的に結びつけられることで、各個人に語ることを可能にする。展示会では歴史のメタ物語は学芸員の包括的な目的ではなく、器物のコレクションに織り込まれた「人びとの」歴史の基礎的な想念である。「話は個々の事例から溢れ出る」(Jensen, 2007, page13)。オーストラリアの身体、感情、そして情動的表出が博物館を作ったのである。

情動を文明化する(パート2)―ネイティヴ自身を生産し、無感情な他者を構成する―

私たちは国立公園と国立博物館の間には異なる情動的表出があり、物質性と帰属それぞれの認識論的体制は結びついていると議論している。双方は市民の福祉、教育、喜びのために具現化された「国民的」空間として設計され体系化されている。しかし、世界へと近づくことで市民的関与の一つのやり方を生産するのではなく、国立公園は「ネイティヴの」風景に対する一つの感覚を維持すること――実際にはそ

れを助長すること――に基づいており、その意味では「自然を国民化すること」そして国民の相互的自然化の中にある（Jazeel, 2005; Kaufmann, 1998）。国立公園は「ふるさと」の風景、あるいは「国民の」自然として表象され、人、土地、国民を結びつける政治的な考えと関連している（Crang, 1999; Mels, 2002, page 137）。イギリスの遺産では、「ネイティヴ」「国民」そして情緒の決裂はイギリス文化の情緒と歴史を「白人化する」、一つの国民のプロセスと強調している（Dyer, 1997; Darby, 2000も参照）。閉塞された「ネイティヴでない」文化、身体、情緒はしばしば「暗黒の」領域と大陸出身者であり、彼らは「文明化されていない」「ネイティヴ化されていない」文化的移民でありディアスポラとされる。市民規約においては、彼らはイギリス国民であり、イギリスの拡張する植民地体制の循環の結果として登場している。しかも、湖水地方の民族ナショナリスト的な情緒の場所の外側にいると考えられている。こうした特定の民族性や情緒は、「国民」文化を「ネイティヴ」として扱う要請とともに埋め込まれたある過程において否定される。その風景は、人間、土地、国民の一つの単純な結びつきを前提とする、非歴史的な「純粋の」エコシステムの感覚を残しながら、空洞化され自然化されるのである。国立公園の場合、植物相と動物相の生態学的な出生率についての科学的意味が、自然で物質的な風景の品位を倍加させていく。

国立公園は博物館的認識において、人種の類型学的想像力と結びつく。この場合、その分類法的区分は世界に埋め込まれている。すなわち、

> 植民地主義の期間、イギリスの特殊な文明性と文化的優越性を表していたのがイングランド的な農村性であった。ポストコロニアルな時代、イングランド的農村性の重要性は（目に見えない）白人性の政治学と、エスニシティ、アイデンティティ、帰属性の構築をめぐって展開してきた（Neal, 2002, page444）。

アングロサクソン族人種の物語についての博物館学的生産は、ベドー（Beddoe, 1971 [1885]）の『大英帝国の人種』のような地図作成と19世紀には調和していた。これは、特別に選ばれた人相学的特徴に基づいた類型学をとおして人間の地図を生産した。ベドーは、黒人性のインデックスを生産し、地図化した。それは色を軽蔑的にコード化したものであり、頭骨の形、目、色、髪の色などと結びついた疑似代数的な公式に基づいている（Winlow, 2001, page 521）。これらの地図は描写にすぎないと主張してはいるが、それは一つのモラルの地理を投射している（Winlow, 2006）。地図の事実性は図化されたアイデンティティのありのままの推論的な性質に対する信頼に役立つものだが、ある周到な問いかけが二つの傾向を暴き出していく。第一に、人種混淆からほとんど影響を受けていないという前提があるために、イングランドの湖水地方の中心はイギリスの白人性と文化的純粋性の暖炉として機能してきた。第二に、克明な差異のカタログ化のために、混淆と移動がイングランドのアイデンティティの基礎であるということは明白だった（Young, 2008, page 131-133）。

この地図は人間の区分と分類をはっきりと作りだそうとする意図を持っていたが、それらはそうした区分が地図作成の所産に過ぎないことも暴き出す。

> サクソン族至上主義はそれゆえ現代の誘発的な人種科学をとおして最終的には首尾よく意義申し立てられる。……人種化学がより洗練され、民族学がイングランド人が人種的に軸索だったという主張を実際に検討し始めると、歴史的、文化的、言語的だけでなく、人種的にもイングランド性というのが回復不能なほどに混淆されたものだということがますます明らかになった（Young, 2008, page 124-125）。

この人種の地図化と平行するのが固定され、境界を持つ自然の風景としての湖水地方の文化的地図化であった――ある（固定され、有界の）ローカルな共同体によって支えられたものと認識される。これはイギリスにおける「ネイティヴ」の風景の維持に対する不安に対する不安において繰り返し表明されている。にもかかわらず、スモウト（Smaut, 2003, page19）が言うように、ネイティヴの生態系に対する主張や要求は「科学的議論では弱体化」しており、正確な生態や歴史よりもむしろ「感情的な問題」によっていっそう活気づけられていることから、「私たちのかけがえのない遺産」に関する古文書の「保護」とさまざまな「民族浄化」は「すぐに明らかになる」。このことは「イギリスの風景史にとって不誠実な文化的かつ自然的カテゴリー化」へと至るのだが、それは「生態学的人種主義」に等しい（Tolia-Kelly, 2008, page 290）。

この遺産の風景において、貯水池に外来種の侵入するのを管理するバセンスウェイト湖清水同盟

によって何度も主張されている「生態の全体性」を守るための一致団結した努力と科学的規範のような、「外来種」を追い払うことに多くのエネルギーが費やされている。それにもかかわらず、湖水地方の綿密な生態学は、この場所に少なくとも10世紀以降、そしておそらくはローマ帝国のブリタニア統治時以降、「非ネイティヴの」魚や動物が長く住んでいることを明らかにし、(土着と外来の)二元論的なアプローチをナイーヴで文化的に不誠実なものにしているのである。ハードウィックの羊はバイキングによって持ち込まれ丘陵地をうろうろとしている。羊がなければ、その風景は森林の自然相へと戻るのであり、それは「外来の」動物が保存の審美性の根拠をなすことを意味している。ベック(小川)やデイル(谷)、ターン(池)、スウェイト(空き地)といった北欧系の地名もまたスカンジナビア人の自然の実践と文化でもってこの風景を徴付けており、ベドーによるイギリス人の分類学の中で姿を見せていた。スキッドウそれ自体はオルドヴィス期の粘土によって成っており、それは5億年以上昔の海の中に堆積物として横たわっていたものである。私たちは今、赤道から南極に向かって3分の1ほど行った所にあるその海をイアペトス海と呼ぶ—その歴史の中では比較的最近に赤道を越えたことになる(Massey, 2006, pages 34-35)。

この遺跡の場の物語では、湖水地方の自然、風景、物質文化を作り上げた文化史の流動性とコスモポリタンな根が強調されていない。ポラードが言うように、「過去の新しい物語を探そうと、農村風景の深淵に見入ってはいけない。これらの幽霊とそれが住み着く場所の掘り起こしはある種の『文化的考古学』である」(Bressey, 2009, page 387に引用)。海岸近くにある「サンボの墓」を例にしてみよう。1730年代に死に、1796年に夏の来訪者によってかき集められた募金で追悼された、知られることのないある黒人奴隷の墓は(Kean, 2008, page 57)、おそらく西インド諸島からやってきたカポックの木であろう「綿の木」と呼ばれるところからオヴァートンで進路を変え、1マイルほど行くとたどり着く。この木は1998年にとうとう風になぎ倒された。実際には越境ローカル的かつ越境文化的な文化、自然、人間によって作られているイングリッシュネスは、何度も「コード化された白人性の条件として」機能してきた。「というのも、あらゆるほかの民族性に対抗する見えない規範が測定され定義されたからである」(Young, 2008, page 239)。そうした複数の歴史の深遠さを無視することは、それ自体、田舎における人種問題に取り組まないという理由付けとして用いられうる。

湖水地方の風景文化を閉じられローカル化された実体として読むことは、ある単一の情緒として、そしてあるイングランドの市民性によって厳密に評価されるものとしてのその表象に内在する。しかしこのことは可動的な国民の越境ローカルな価値や情動的経験を正しく反映していない。湖水地方の大衆的な風景の審美性は自然、風景の外見、そして文化の永久の経験を提示する。そこではあるイングリッシュネスがパッケージ化された19世紀のロマン主義を通して定義されている。ウィリアム・ワーズワースによる〔湖水地方の〕特定の場所や道筋に関する描写は、楽しみと評価のピクチャレスク的な文化を具体化するこの風景の想念を守るために、湖水地方の観光経済の中で何度も用いられている(Squire, 1988)。しかしワーズワースの詩は、しばしば用いられる「牧歌的な山々の間に生きる質素な生活や農村経済への郷愁」(King, 1966, page 171)をこえた、崇高なるものに対する彼の直感的な恐怖や畏怖といった応答を反映している。自然を強調するワーズワースはしばしば政治の世界から「自然詩人」への退避として言及される。しかし、彼が言う自然とは、丸裸にされた人間主義的な市民性に対する最後の手段の場であり、それは革命的な生態学を提供する。すなわち彼が保護を主張した目的は、単純に、あるローカルなカンブリア紀の牧歌性を守ることではなく、湖水地方の生態学的公民権付与を押し広げることであった。若きワーズワースの政治は、今日の遺産経済をとおして守られ、また駆り立てられる情緒の「国民的」自然を揺さぶるために重要である。まさに私たちは彼による自然の詩や風景の情緒性それ自体を越境ローカルなものとして考えることができる。湖水地方とワーズワースの感情的な関係性は、植民地化された海外に対する共感を積み込んだラディカルな情緒性をかくまっているのである。

情動の生態学と越境文化的な類型学

確かに若き日のワーズワースにとって、イングランドとはまずは一つの政治的力であって、無害のネイティヴの領地ではなかった。彼は1803年、『モーニング・ポスト』紙に「トゥサン・ルヴェルチュールのために」と題したソネットを寄せた。それはフランス植民地における「黒人法」回復を非難するもの

だった。イングランドの身体政治も同じように植民地主義的抑圧の方法であった。ワーズワースの社会的情緒性は「単一の人間の精神」（Wordsworth, 2004, page 58）という想念の中で形づくられた。それは育成と避難の場としての風景というある国際的な想念で取り囲まれていた。初期の状態では湖水地方は国際的な情緒性の自然の場であり、他者の苦しみ、非人間化、客体化に敏感に対応していた。特に、ド・クインシー（De Quincey, 1921, page43）はワーズワースの人間主義が植民地主義の経済からの避難場所を具体化したものだと論じている。通常想定される有界の「ローカルらしさ」を称揚する「自然詩人」というワーズワースの正典化では、彼の自然と風景に対する愛が、実際にはより広くグローバルに位置づけることのできる情緒であるということを捉え損なうことになる。ワーズワースの感情的生活の中心であるグラスミア湖の風景は資本主義的生活の磊落から逃れて感情的に豊かになるための手段である（Bate, 1991, page 26）。

ワーズワースの畏怖の念に基づいた情緒は、植民地主義的な分類法と結びつき、またそれに挑もうとする、ある感覚的な色彩を与えている。田舎に同情を示す能力は、文化的評価の定義と、それゆえのアイデンティティの中心に位置している。それゆえ、私たちのアイデンティティの「性質」に対する情動的な応答と疑問は相互に結びついている。歴史的にいえば、そこで現れているのは文明化された文化の「中心」という想念であり、それは正確に幹事、評価することのできるものである。美を感じる能力は「他者」を拒んでいた。美的な価値、情緒、文化遺産は文化的定義の持つ基本的な価値体系の中で絡み合っている。湖水地方の文脈では、これらは次のようなものに長く関心を示してきた。

> 帝国的衰退、人種的退化、そして階級闘争に対する恐れ、〔それは〕―バーデン・パウエルのボー紙スカウトからセシル・シャープのフォークダンス協会に至る―ここ数年のあらゆる団体にとっての礎石を置いている。都市生活が持つ不健康な肉体的かつ精神的状態に対するすべての不安は、自然世界にその「犠牲者」が接触することに対するものである（Trentmann, 1994, page 585）。

風景の経験に対する情緒性を教え込むことをとおして、真正なイングリッシュネスを押しつけることにより、（白人の）洗練さが取り戻される、そうした場として農村は考えられた。1930年代までにおよそ10万人のイングランドの男性と女性が「マオリ・テント」という人気あるブランドに宿泊しながら、田舎で定期的にハイキングを楽しんでいた。

甘くコーティングされたウィンダミア湖の再発明と市場化は平穏で平和で牧歌的な情動的楽しみを提供する。ワーズワースが最初に感じた恐怖の経験は、こうして差し出される遺産空間との遭遇の中にはない。しかしこのことは、湖水地方に存在する情緒性を終わらせる。そこで提供される越境文化的な経験は、恐怖とは何度も出くわすものであること、またその風景は今日の来訪者の経験の中で、畏怖の念と強く共振するものであるということを意味している（Kinsman, 1995; Tolia-Kelly, 2007）。エィスキンズ（Askins, 2009, page 368）が言うように、農村をすべての人に対して同じだと単純に普遍化したり、あるいは「彼らは別の民族的バックグランドを持つから、別の『自然神話』や自然の評価を持っている」と、単純に人びとを風景の情動的魅力から追い払ったり、あるいはそこにアクセスすることのできないようにして「他者化」することには二重の落とし穴がある。そうではなく彼女は複雑な応答の情動的一覧表を書き付ける。確かに、そこには不安がある（異なる来訪者として非常に目につくことがいくぶん不安へと駆り立てるのだが、人種的分断線を横断するジェンダー化された関心もまたそれへと駆り立てる）。しかしジェンダー、年齢、階級によって横切る他の感情や理性的感情（自由の感覚のような肯定的なもの、退屈のような否定的なもの）もまたある。ネイティヴと外部者という区分は、両者の類似性が遠く離れた場所において現れるような場において感じられた共振によってかき乱される。エィスキンズの応答者たちが見せる情動的な反応は、ヒマラヤやジャマイカのブルー・マウンテンといった山々の高地の国立公園とはっきり結びついている。その一方、農村は遠く離れた先祖代々の家と結びついており、それゆえ「農村性は他の空間と場所をもつれさせ、またそこでもつれ合う」（2009, page 371, 373）。同じように、場所との情動的な結びつきは異なるだろうが、トーリア-ケリー（2007a, page 343, 346-347）は移民の女性がたとえ「100メートルほど高かったり険しかったりするようなヒマラヤの高地に住んでいた経験を持っていた」としても、物理的な山である湖水地方への恐怖を示し、〔湖水地方の遊歩道〕カークストン・パスを登り歩くことを拒否すると言う。ここで彼女らは身体実践としてのあるいは山頂踏破としてのウォーキングが持つ情動的なアピールを拒否する（Lorimer and Lund,

2003)。ある人たちは閉じ込められた家庭内の状況からの開放をもたらす場所として丘陵に喜びと爽快さを感じる。こうした異質な情動的配分が身体、国民、領域性をつなぎ直していくのである。

結論

人種の情動的配分は遺産との出会いにおいて立ち現れる。すなわち、人種は場、身体、理性的感情の間の運動をとおして生産されるのである。本稿で私たちは「情動的配分が心理的であると同時に社会的かつ物質的なものとして考えられる必要がある」(Ahmed, 2004, page 121)ことを示してきた。風景の文化と情動の関係は、見ることと見られることの物質的実践と物質的現前をとおした差異化をもたらす(Tolia-Kelly, 2006)。喚起される感情は普遍的ではなく個人的であり、権力、アイデンティティ、モビリティの結節から現れるものとして歴史化されねばならない。この情動の表出と応答の差異化は、情動の普遍性や自律した応答などないということを強調する。一つの情動的応答が普遍的に生産されるという考えは、湖水地方のような場所が行ってきた、特定の経験に対する民族的なコード化を覆い隠すことになる。そのような、感じられた応答を、状況づけたり歴史化したりしないで、場や風景の場や風景の情動的力に関心を払うことは危険である。同じく、情動的な配分を生産するものとして遺産を捉えることで、個人の欠点、あるいは合理的な応答に比肩する単なる感情として排除や嫌悪の理性的感情を棄却することを乗り越えることができる。風景との出会いは多数の力強い移動を促していく。

問題は次のようなものである。すなわち、どのような情動でもって遺産が新しい時代を誘発するのかということだ。私たちはポピュリズム(楽しむために文化を自由競争的に商品化するリスクがある)、あるいは相異なる解釈的なオーディエンスが捜し出される共同体ベースのアプローチ(共同体を本質化したり、相互のコミュニケーションが持つ進歩的な共通性を前提したりするリスクがある)と、改変されたモダニズム(別の情緒を見失うリスクをともなう、普遍的な意味の理想を保持し続ける)との間の闘争を描き出すかも知れない(Dibley, 2005)。本稿は、「市民的」遺産の風景における倫理的な方向性を可能にするために必要となるのが、芸術と文化の開かれた越境文化的な応答を推進する考え方の枠組みであると提案する(Tolia-Kelly, 2007b)。越境文化的で感情的な市民性のアイデンティティ化は文化的プラクシスの中に埋め込まれており、(その時間的かつ空間的な形勢において)絶対的権力imperiumを横断する風景の結びつきに影響を受ける。感情的な価値や愛着は、イングリッシュ/ブリティッシュの情緒性に寄与するネットワーク化された運動性の結果である。このアプローチはブリティッシュネスと遺産の価値を、帝国的なカテゴリー化から回復するための越境的な情動の影響という視点から探求する。それゆえ私たちはイングランドの湖水地方から感じられた際によって循環させられ、また生産された越境文化的な情動を捉えることができるのだが、同時にアジアの山々に対して感じられた親密性も検討できる。あるいは東洋に対するロマン主義的政治の誘発によって可能になる情動、あるいはポリネシアから持ち帰られた伝統的なオブジェの復活や、以前はばらばらだったものが新しい物質をともなう新しい様式をとおして生き返っていくことで、通常は静的で「あちら側」として描かれてきた伝統が、活気を取り戻し、「こちら側」となっていくことが考えられた。

イギリスにおける国民遺産の諸制度は今日、包摂の問題に対してよりはっきりと敏感になっている。しかしこれを中立的な分類法、あるいは寛容さの空間として枠付けることは、認知的な過程をとおして理解される知識の普遍主義的様式に集中していくことになる。感情的応答、そして感情的アピールは遺産の権力の中心部に位置すると考えれば、諸制度によって情動的活力が結集されていく地勢と諸制度との関わりが重要になる。その教唆と生産は、博物館の器物蒐集と同じく根深い植民地的かつ人種的名残を有している。しかし遺産への応答が持つ情動的配分に取り組むことで、想定される普遍的な感情あるいは多様性の巧妙な視覚的展示においてではなく、異成分からなる感じられた応答をとおした共感においてこそ、新しい連帯の様式を見つけられるかも知れない。

注

1) 近年の展示会のパターンは大英博物館の変化しつつある声を立証するが、より公然と蒐集展示の声の問題に取り組んできたホーニマン、オクスフォード、ケンブリッジの人類学博物館といったその他の博物館よりもむしろ遅れてこれらの問題に応答していることを示してもいる。大英博物館における新しい声の出現はすでに水面下で進行してきた多くの協同作業を十分に生かし浮き彫りにする。

参考文献

Ahmed S, 2000, Strange Encounters: Embodied Others in Post-coloniality (Routledge, London)

Ahmed S, 2004, "Affective economies" Social Text 22 121 -139

Alizar T V, 2009 Role of Museums and Libraries in Strengthening Communities (Nova Science Publishers, New York)

Anderson K, 2007 Race and the Crisis of Humanism (UCL Press, London)

Askms K, 2006, "New countryside, new country: visible communities in the English national parks", in The New Countryside?: Ethnicity, Nation and Exclusion in Contemporary Rural Britain Eds J Agyeman, S Neal (Policy Press, Bristol) pp 149 -172

Askins K, 2009, Crossing divides: ethnicity and rurality" Journal of Rural Studies 25 365 - 375

Bate J, 1991 Romantic Ecology: Wordsworth and the Environmental Tradition (Routledge, London)

Beddoe J, 1971 [1885] The Races of Britain: A Contribution to the Anthropology of Western Europe (Hutchinson, London)

Bennett T, 2002, "Archaeological autopsy: objectifying time and cultural governance" Cultural Values 6 29 -47

Bennett T, 2004 Pasts Beyond Memory: Evolution, Museums, Colonialism (Routledge, London)

Bennett T, 2005, "Civic laboratories: museums, cultural objecthood and the governance of the social" Cultural Studies 19 521-547

Bhattacharyya G, 1998 Tales of Dark-skinned Women, Race, Gender and Global Culture (UCL Press, London)

Bohrer F, 1994, "The times and spaces of history: representation, Assyria, and the British Museum", in Museum Culture: Histories, Discourses, Spectacles Eds D Sherman, I Rogoff (Routledge, London) pp 197-222

Bressey C, 2009, "Cultural archaeology and historical geographies of the black presence in rural England" Journal of Rural Studies 25 386-395

Clifford J, 1997 Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century (Harvard University Press, Cambridge, MA)

Colley L, 1992 Britons: Forging the Nation 1707-1837 (Yale University Press, New Haven, CT)

Crang M, 1999, "Nation, region and homeland: history and tradition in Dalarna Sweden" Ecumene 6 447-470

Crang M. 2003, '"On display: the poetics, politics and interpretation of exhibitions", in Practising Cultural Geography Eds J May, A Blunt, P Gruffud, M Ogborn, D Pinder (Arnold, London) pp 255-268

Cubitt S, Sarder Z, Araeen R, 2002 The Third Text Reader: Art, Theory and Culture (Continuum, London)

Daniels S, 1993 Fields of Vision: Landscape Imagery and National Identity in England and the US (Polity Press, Cambridge)

Darby W J, 2000 Landscape and Identity: Geographies of Nation and Class (Berg, London)

Davidson J, Bondi L, Smith M (Eds), 2005 Emotional Geographies (Ashgate, Aldershot, Hants)

Department for Culture, Media and Sport, 2005 Understanding the Future: Museums and 21st Century Life (Department for Culture, Media and Sport, London)

De Quincey, 1921, "Wordsworth's poetry", in Poetry and Prose, with Essays by Coleridge, Hazlitt, De Quincey (Clarendon Press, Oxford) pp 36-44

Dibley B, 2005, "The museum's redemption: contact zones, government and the limits of reform" International Journal of Cultural Studies 8 5 - 27

Driver F, Gilbert D, 1998, "Heart of Empire? Landscape, space and performance in imperial London" Environment and Planning D: Society and Space 16 11 - 28

Duncan C, 1991, 'Art museums and the ritual of citizenship", in Exhibiting Cultures: The Politics and Poetics of Museum Display Eds I Karp, S Lavine (Smithsonian Press, Washington, DC) pp 88-103

Durrans B, 1979, "Ancient Pacific voyaging: Cook's views and the development of interpretation", in The British Museum, Captain Cook and the South Pacific Ed. T C Mitchell (British Museum Publications, London,) pp 137-166

Dyer R, 1997 White: Essays on Race and Culture (Routledge, London)

Dyson L, 2005, "Reinventing the nation: British heritage and the bicultural settlement in New Zealand", in The Politics of Heritage: The Legacies of Race Eds J Littler, R Naidoo (Routledge, Abingdon, Oxon) pp 115- 129

Fagg W, 1953 The Webster Plass Collection of African Art: The Catalogue of a Memorial Exhibition held in the King Edward VII Galleries of the British Museum (British Museum Press, London)

Gilbert D, Driver F, 2000, "Capital and empire: geographies of imperial London" Geojournal 5123-32

Gilroy P, 1993 The Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness (Harvard University Press, Cambridge, MA)

GLA, 2005 Delivering Shared Heritage: The Mayors Commission on African and Asian Heritage Greater London Authority, London

Hall S, 1990, 'Cultural identity and diaspora", in Identity, Community, Culture, Difference Ed. J Rutherford (Lawrence and Wishart, London) pp 222-237

Hall S, 1997 Cultural Representations and Signifying Practices (Open University Press, Maidenhead, Berks)

Hall S, 1999, “Un-settling ‘the heritage’, re-imagining the post-nation: whose heritage?” Third Text 133-13

Hall S, 2000, “Conclusion: the multicultural question”, in Um’settled Multiculturalisms: Diasporas, Entanglements, Transruptions Ed. B Hesse (Zed Books, London) pp 209-241.

Hetherington K, 2006, “Museum” Theory, Culture and Society 23 597 - 603

Hill K, 2005 Culture and Class in English Public Museums 1850-1914 (Ashgate, Aldershot, Hants)

Hogan J, 2009 Gender, Race and National Identity: Nations of Flesh and Blood (Routledge, New York)

Hooper-Greenhill E, 1992 Museums and the Shaping of Knowledge (Routledge, London)

Jazeel T, 2005,” ‘Nature’, nationhood and the poetics of meaning in Ruhuna (Yala) National Park, Sri Lanka” Cultural Geographies 12 199-227

Jensen S, 2007, “Museums and emotion: fear and passion in public spaces”, in Museum of Antiquities Maurice Kelly Lecture (Museum of Antiquities, Arnidale, NSW) pp 1-33

Karp I, Kratz A, Szwaja L, Ybarra-Frausto T, 2006 Museum Frictions (Duke University Press, Durham, NQ

Kaufmann E, 1998,” ‘Naturalizing the nation’: the rise of naturalistic nationalism in the United States and Canada” Comparative Studies in Society and History 40 666 - 695

Kean H, 2008, “Personal and public histories: issues in the presentation of the past”, in The Ashgate Research Companion to Heritage and Identity Eds B Graham, P Howard (Ashgate, Farnham, Surrey) pp 55 - 70

King A, 1966 Wordsworth and the Artists Vision: An Essay in Interpretation (Athlone Press, London)

King S M, 2007 Whiteness in the English Countryside: A Case of the National Trust PhD thesis, Department of Geography, University of Durham

Kinsman P, 1995, “Landscape, race and national identity: the photography of Ingrid Pollard” Area 27 300- 310

Lionnet F, 2004, “The mirror and the tomb: Africa, museums and memory”, in Museum Studies: An Anthology of Contexts Ed. B Carbonell (Blackwell, Oxford) pp 92 -103

Littler J, Naidoo R, 2005 The Politics of Heritage: The Legacies of Race (Routledge, Abingdon, Oxon)

Lorimer H, Lund K, 2003, “Performing facts: finding a way over Scotland’s mountains”, in Nature Performed: Environment, Culture and Performance Eds B Szerszynski, C Waterton (Blackwell, Oxford) pp 130-145

McCormack D P, 2003, “An event of geographical ethics in spaces of affect” Transactions of the Institute of British Geographers, New Series 28 488-507

McCrone D, Morris A, Kiely R, 1995 Scotland—The Brand: The Making of Scottish Heritage (Edinburgh University Press, Edinburgh)

Mack J, 2003 The Museum of the Mind (British Museum Press, London)

Massey D, 2006, “Landscape as a provocation-reflections on moving mountains” Journal of Material Culture 11 33-48

Matless D, 1998 Landscape and Englishness (Reaktion, London)

MelsT, 2002, “Nature, home, and scenery: the official spatialities of Swedish national parks” Environment and Planning D: Society and Space 20 135 -154

Mercer K (Ed.), 2008 Exiles, Diasporas and Strangers (MIT Press, Cambridge, MA) pp 146-165

Moscati P (Ed.), 2007 “Virtual museums and archaeology” Archeologia e Calcolatori Supplement 1

Naidoo R, 2005, “Nevermind the buzzwords: ‘race’, heritage and the liberal agenda”, in The Politics of Heritage: The Legacies of Race Eds J Littler, R Naidoo (Routledge, Abingdon, Oxon) pp 36-48

Neal S, 2002, “Rural landscapes, representations and racism: examining multicultural citizenship and policy-making in the English countryside” Ethnic and Racial Studies 25 442-461

Neal S, Agyeman J (Eds), 2006 The New Countryside?: Ethnicity, Nation and Exclusion in Contemporary Rural Britain (Policy Press, Bristol)

Nielsen C, 2008 To Inspire and Instruct: A History of Medieval Art in Midwestern Museums (Cambridge Scholars Publishing, Newcastle upon, Tyne)

O’Neill M, 2004, “Enlightenment museums: universal or merely global?” Museums and Society 2190-202

Pile S, 2010, “Emotions and affect in recent human geography” Transactions of the Institute of British Geographers, New Series 35 5 -20

Saldanha A, 2006, “Reontologising race: the machinic geography of phenotype” Environment and Planning D: Society and Space 24 9 - 24

Schildkrout E, 2004, “Ambiguous messages and ironic twists: into the heart of Africa and the other museum”, in Museum Studies: An Anthology of Contexts Ed. B Carbonell (Blackwell, Oxford) pp 181 -192

Schwartz B, 1996, “The expansion and contraction of England”, in The Expansion of England: Race, Ethnicity and Cultural History Ed. B Schwartz (Routledge, London) pp 1 - 9

Smout C, 2003, “The alien species in 20th-century Britain: constructing a new vermin” Landscape Research 28(1) 11-20

Squire S, 1988, “Wordsworth and Lake District tourism: romantic reshaping of landscape” Canadian Geographer 32 237 - 247

Starzecka D C, 1996, “The Maori collections in the museum”, in Maori Art and Culture Ed. D C Starzecka (British Museum Press, London) pp 145 -158

Swallow D, 1998, “Colonial architecture, international exhibitions and official patronage of the Indian artisan: the case of a gateway from Gwalior in the Victoria and Albert Museum”, in Colonialism and the Object: Empire, Material Culture and the Museum Eds T Barringer, T Flynn (Routledge, London) pp 52 - 67

Sylvester C, 2009, “Cultures, nations and the British Museum”, in Art/Museums: International Relations Where We Least Expect it Ed. C Sylvester (Paradigm Publishers, Boulder, CO) pp 33-53

Thien D, 2005, “After or beyond feeling? A consideration of affect and emotion in geography” Area 31450-454

Thrift N, 2004, “Intensities of feeling: towards a spatial politics of affect” Geografiska Annaler, Series B 86 57 -78

Tolia-Kelly D, 2006, “Affect—an ethnocentric encounter?: exploring the ‘universalist’ imperative of emotional/affectual geographies” Area 38 213 - 217

Tolia-Kelly D P, 2007a, “Fear in paradise: the affective registers of the English Lake District landscape re-visited” Senses and Society 2 329 - 351

Tolia-Kelly D P, 2007b, “SPILL: liquid emotion and transcultural art”, in SPILL Exhibition Catalogue (SASA Gallery, Adelaide)

Tolia-Kelly D, 2008, “Investigations into diasporic cosmopolitanism: beyond mythologies of the ‘non-native’”, in New Geographies of Race and Racism Eds C Dwyer, C Bressey (Ashgate, Farnham, Surrey) pp 283 - 296

Trentmann F, 1994, “Civilization and its discontents: English neo-romanticism and the transformation of anti-modernism in twentieth-century Western culture” Journal of Contemporary History 29, 583-625

Voogt P, 2008, “Can we make a difference?: museums, society and development in North and South”, Bulletin 387 of the Royal Tropical Institute (KIT Publishers, Amsterdam)

Winlow H, 2001, “Anthropometric cartography: constructing Scottish racial identity in the early twentieth century” Journal of Historical Geography 27 507 - 528

Winlow H, 2006, “Mapping moral geographies: W. Z. Ripley’s races of Europe and the United States” Annals ofthe Association of American Geographers 96 119-141

Wordsworth W, 2004 Guide to The Lakes (Frances Lincoln, London)

Young R C, 2008 The Idea of English Ethnicity (Blackwell, Oxford)